知求会ニュース

2006年05月

第18号

入学おめでとうございます！

4月7日（金）午後1時半から、宇都宮市文化会館にて入学式が挙行されました。今年度の入学者は、国際社会研究専攻第8期生が9名（内留学生6名）、国際文化研究専攻第8期生が10名（内留学生5名）、国際交流研究専攻第3期生が16名（内留学生10名）の合計35名（内留学生21名）が入学されました。そして、4月10日（月）午後3時から、国際学部大会議室にてオリエンテーションが開催され、大学院同窓会は総務係の事務方に依頼して、新入生に大学院同窓会の名簿記入をお願いしました。なお、学長の入学式「学長式辞」が大学HPで見られます。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/gakucho/shikiji-nyugaku-18.html>

「石橋 純」先生出版記念講演会報告

『太鼓歌に耳をかせ - カリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』講演会

寄稿者 岩永 健吾

2000年4月から3年間に渡り、宇都宮大学国際学部および国際学研究科で講義を担当された石橋純先生が、この1月に自身の博士論文をもとにした書籍『太鼓歌に耳をかせ - カリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』を刊行した。4月14日（金）午後7時から出版記念講演会が、石橋先生の現在の勤務先である東京大学駒場キャンパスで開催された。講演への参加者は120名ほどで、当初予定していた会場が変更になるほどの盛況だった。

この講演会を主催した日本ベネズエラ協会会長、および在日ベネズエラ全権大使による挨拶のあと、石橋先生による講演とフロアを交えた質疑応答が行われた。講演の中では石橋先生のフィールド調査をもとに制作された映像作品も上演された。講演の内容はこの本で取り上げられた地域コミュニティのミクロな運動そのもの（こちらは本を読んでください、とのこと）よりむしろ、地域コミュニティをとりまくマクロな社会政治状況の説明に重きが置かれた。

講演の中で印象に残ったのは、ベネズエラの民衆が、政治により引き起こされた大衆弾圧の過去を忘れず、なぜ歌にして歌い継いできたかという問いである。講演の中で石橋先生が述べたことは、「ストリートに出て社会政治体制に対して行動する民衆」や、「バリオ住民一人ひとりがいかに努力しようとも一代では到底変えることができない社会格差」の存在であろう。祭りの太鼓歌が絶頂のときに「ひとつの痛みはもうひとつの痛みをやわらげてくれる」と歌う地域コミュニティの歌い手。そこにはやり場のない暗さを、楽しいこと、希望をみつけようという意味をもって喜びにつなげるというバリオ住民の生きざまがある

というのが、結論に代わるものではなかったか。

講演後には、場所を移して懇親会が開催され、宇大国際学部 / 国際学研究科 OB・OG の姿もみられた。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

新刊案内

橋本 孝名誉教授が、本年3月6日に五月書房より『福祉の町 ベーテル』を刊行されました。詳細は、以下のHPでご覧下さい。(<http://www.gogatsu-shobo.jp/>)

掲載記事紹介

1 .朝日新聞 平成 18 年 4 月 16 日(日)に、2 頁総合欄「ひと」のコーナーで『福祉の町「ベーテル」の絵画展を主催したドイツ文学者』と題した**橋本 孝**名誉教授の記事が掲載されました。

国際学部だより

1 . キャリアフェスティバル開催

6月17日(土)12時に大学会館多目的ホールにて、キャリアフェスティバルの基調講演、分科会が開催されます。国際学部は「外資系等、海外勤務をめざすコース」を担当します。

2 . シンポジウム開催

5月24日(水)午後1時から4時まで、大学会館多目的ホールにて、映画とシンポジウム(講演会も含む)が開催されます。講演者は**谷澤壮一郎**氏、映画は「イラクに接近す」を上映。シンポジウムには**松尾昌樹**先生が参加されます。このシンポジウムは市民公開ですので、奮ってご参加下さい。

3 . 掲載記事紹介

「UU now リニューアル第5号」の4頁に「ベストティーチャーに聞く」の記事が掲載されました。その内容は、「平成17年度ベストティーチャー」として、上位8名のうち、留学センター 副センター長の**若山俊介**先生が選出され、「ベストティーチャー賞」を授与されました。

「宇都宮大学新聞 第168号」(2006年4月24日発行)の2面・3面に「寄稿 教員から新生へ」において、国際学部の**石浜昌宏**先生が、「メディア・リテラシーの薦め」と題して寄稿されました。

研究室訪問 10 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第10回目には、地球文化形成研究講座所属の名誉教授・小林隆久先生をお願いしていましたが、先生のご都合により次号に掲載します。

知究人 05 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(**ちきゅうびと**)を設けました。第18号の第6回目も、寄稿者を探しているところですのでお休みします。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。 2006年の
皇月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は、北島
研究室OB・吉川光洋さんと国際交流研究専攻第1期生友松研究室OG・阿部明代さん
にお願いしました。

「東京農工大学大学院 連合農学研究科紹介」

吉川 光洋

国際学部・国際学研究科のみなさん、こんにちは。2004年3月に国際学研究科国際社会
研究専攻を修了後、東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)に進学し、既に2年
が経過しました。今年度からもう3年生です。順調に行けば学位を取って修了となります。

東京農工大学?農学部?と聞いて国際学との関係を不思議に思う方もいるかもしれませ
んので、まずそのことについて触れたいと思います。国際学部の先生方が担当する講義か
らもわかるように、国際学は広領域かつ複合的な学問で、国際学と社会学・経済学・環境
学・行政学・農学など、いくつかの学問に依拠したものになっています。そのため、国際
学部で農業や農村に関連するテーマ、例えば「農村開発の国際比較」、「農村コミュニ
ティの教育問題」、「観光開発」といった研究を行った場合、農学部でも継続が可能で、近年
では博士課程進学者、研究生在籍者を含め国際学部出身者の数は増える傾向にあります。

このような研究環境に身を置けることから、進学をした訳ですが、もともと私は他大学
(社会学部)出身で、修士課程のみを宇都宮大学(国際学研究科)で過ごしました。学部
は異なりましたが、現在までの研究は社会学に基づいたもので、卒業論文、修士論文とも
にグリーン・ツーリズムに関する研究を行ってきました。あまり聞きなれない言葉かもしれ
ませんが、分かりやすく言い換えると、グリーン・ツーリズムとは余暇を利用して農村
地域に滞在し、その地域の「伝統」や「文化」に触れ、地域住民と交流する行為を指しま
す。狭義では農家が副業で経営する農家民宿に宿泊し、その農家の敷地内や近隣でのアク
ティビティを楽しむものとの認識が高いのですが、広義では田舎へ行って何か(観光・
交流活動、購買行動など)をしてくることまでがグリーン・ツーリズムと扱われ、「土日に
ドライブし道の駅で農産物を買った」、「修学旅行で収穫体験をした」ことまでが含まれま
す。このようなことから、今日では地域活性化や余暇政策、農村環境整備の観点から多く
の地域で導入・展開されています。

このグリーン・ツーリズムを行うことによって都市住民が農村地域の魅力を知り、移住
(Iターン)を行うケースが増えています。そして、移住後に地域で陶芸や木工、農業など
に取り組むIターン者たちの活動が地域住民にも刺激を与え、これまでとられてきた定住政
策、観光振興策とは異なる移住者獲得、地域活性化のイノベーション的機能を果たすの
ではないかという仮説のもと、修士論文での研究内容を発展させるかたちで博士論文の執筆
にあたっています。

研究に際し、私のようにフィールドでの実証研究を行う者にとって、研究室で本を読む
ことも大切ですが、外に出て現場の声を聞くことが最重要で、地域に入り込んで調査をす

ることが求められます。そのため、年間を通して各地を飛び回るような生活をしています。また、博士課程は人数が少なく、専門分野が異なるため学会や研究会などを除くと議論・交流・情報交換の場は限られてきます。研究のためには常に新鮮な情報に触れていないといけませんので、博士課程1年次に、私の意見に賛同してくれた友人数人と、農村空間の活用や観光について議論する場として「ツーリズムデザイン研究会」を設立、2年次にはグリーン・ツーリズム関連のNPOの立ち上げに関わり、以降、研究員として週に2日勤務を行いながら大学に通う日々を送るなど、自分なりに日々の研究に生かせる有効な機会を模索しながら生活しています。

最後に、博士課程への進学を考えている方もいらっしゃると思いますので、簡単に私の在籍する東京農工大学の場合の紹介をしたいと思います。

博士課程は学部や修士課程とは指導形態が異なり、授業はほとんどなく、3年間という時間が与えられます。極端に言えば3年間の使い方が自由であり、1日の使い方も自由です。ただ、研究を疎かにすることはできないので、昼間寝ていて人がいなく集中できる夜から研究室に来る人もいれば、規則正しく生活をする人、自宅で研究を行っている人など様々な院生がいます。そして、自身の計画のもと研究を行い、定期的に指導教員のところへ成果を持参し指導を受けます。学部ゼミやティーチングアシスタント等に参加をすることもありますが、授業の準備やゼミ生へのアドバイスなど、学生と教員の間隔的な存在であり、単に「授業に出るだけ」というスタンスではありません。

修了の条件は、規定の授業の単位を取得すること、学会誌に論文が最低1本は掲載されること、博士論文が審査を通ることであり、研究のペースを調整しながら時間を有効に使うことが求められます。

以上が私の研究と博士課程の紹介ですが、もし関心のある方やもっと話を聞きたいという方がいらっしゃいましたら国際学部と同じ峰キャンパスにありますので、気軽に研究室（農学部 農業経済学科棟 1階 院生室3）までお越しください。問い合わせ先は028-649-8643(研究室直通) da041035@cc.utsunomiya-u.ac.jp です。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生)

「同志へのメッセージ」

阿部 明代

優秀な卒業生の中、私が後に続く方々へ言葉を送る意義を見出すならば、濃厚な辛酸を舐めた経験から語られる修士論文制作についてであろう。

院生は学生というよりは研究者の自負心のもとにあるが、入学後の1年間は受講や種々の雑多に追われ見通しも漠然のまま過ぎる様である。そのため実質、1年間で研究を成就させることになる。(長期履修生の方も時間密度は同程度ではなかろうか)

その様な状況において重要と考えられるのが、期間内で遂行できる探求範囲の見極めであろう。絵画に例えれば、描きたい対象が壮大であるならば院生活という期限内において

は、まずデッサンを完成させるなど、ある段階に限定した形での完成を目指すことが重要になる。また、幸運にも早い時期にデッサンに取り掛かれたとしても、継続して創造に挑む情熱、気力が重要である。

私自身の経過を言うと、デッサン仕上げ終盤に死角にある多くの対象物に気付き、動転しているうちに制限時間を失った、という状態であった。その辛酸を経て、現在私が新たな段階へ進む中で心に留めている言葉に、Never give up・Imagination・Vision・Commitment がある。これはケニアの副環境大臣 W. マータイ氏（ノーベル平和賞受賞者）が政府の弾圧に屈することなく、地元民を巻き込んだ形で植林活動を継続させ、政府の意識変革を促した、その経験から語った言葉である。彼女は、目の前の困難を乗り越える原動力となるのは、現在の経過が、どのような将来を目指してのものなのかを想像する力であると語った。そして、それら目標を諦めることなく持ち続け、行動を続けることが目標に到るために重要であると語った。

みなさん、教官陣の英知を糧に考える楽しさを堪能しつつも、困難を感じたときは大学院での研究を将来にどう繋げたいのかイメージし抱き続けて欲しい。そして、院生活というキャンパスに描ける段階を見極め、その手を止めることなくペンを握り続けて欲しい。

終了時、みなさんが人生の糧となる達成感を胸にされている様、同校同志としてエールを送り続けたい。

（国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生）

課外活動共用施設事業資金募金状況経過報告その5

昨年の3月末に大学から発送された募金状況は、大学のホームページに詳細が公開されています。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/bokinhoukoku.pdf> 同窓会の募金状況(平成18年3月31日現在)は、国際学部 39件 302,000円の**1.5%**、教育学部 300件 3,514,720円の**16.9%**、工学部 240件 2,130,000円の**10.3%**、農学部 1,303件 14,805,000円の**71.3%**です。募金の全体から同窓会の内訳を見ますと、保護者 1,188件 6,361,600円の**14.6%**、同窓会 1,882件 20,751,720円の**47.6%**、役員・教職員 394件 7,908,000円の**18.2%**、企業・その他 157件 8,529,000円の**19.6%**でした。**なお、日本郵政公社の口座番号は平成18年4月3日で閉鎖されました。**課外活動共用施設の記事が、UU now 第4号7頁に紹介されていますので、ご覧下さい。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/index.html>)

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net